

# 耳管開放症における『鼻すすり』に対する聴力レベルの影響に関する研究

著者	長谷川 純
号	77
学位授与番号	3410
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/45821">http://hdl.handle.net/10097/45821</a>

氏 名（本籍）	は せ がわ 長 谷 川	じゅん 純
学 位 の 種 類	博 士 （ 医 学 ）	
学 位 記 番 号	医 第 3 4 1 0 号	
学位授与年月日	平 成 19 年 9 月 12 日	
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 2 項該当	
最 終 学 歴	平 成 6 年 3 月 24 日 福島県立医科大学医学部医学科 卒業	
学 位 論 文 題 目	耳管開放症における『鼻すすり』に対する聴力レベルの影響に関する研究	

（主 査）

論 文 審 査 委 員	教授 小 林 俊 光	教授 市 江 雅 芳
	教授 高 橋 昭 喜	

## 論 文 内 容 要 旨

耳管開放症の出現と聴力の関係は、これまで特に注目されることはなかったが、今回聴力の良否（聴力レベル）と耳管開放症の症状出現には密接な関係があることを検討した。耳管開放症患者では自声聴取・呼吸音聴取などの不快症状を避けるため、『鼻すすり』を行うことで耳管を閉鎖させ、症状を軽減させているケースがあり、中耳真珠腫の成因の1つとも成り得るが、この『耳のための鼻すすり』の有無に、患者の聴力レベルが関係していることを示した。つまり、背景に鼻すすり癖をもつ後天性中耳真珠腫群と、鼻すすり癖をもたない後天性中耳真珠腫群において、術前の気導聴力、および気骨導差の術前後の変化を比較した結果、①術前の気導聴力は、『耳のための鼻すすり』を有する群の聴力は、有さない群の聴力に比べ、有意に良好であること。②術前後の気骨導聴力低音域（250, 500, 1000 Hz）での変化を比較すると、術後に『耳のための鼻すすり』を止めることが出来た群では、気骨導差が縮小（聴力改善）している例も、拡大（聴力悪化）している例も様々であったが、術後に『耳のための鼻すすり』を継続している例では、一様に気骨導差に変化がない（聴力不変）か、または縮小（聴力改善）していた。『耳のための鼻すすり』の継続に関しては、聴力の良悪が大きく関係しており、聴力が良好な症例ではこれを止めることが出来ず、中耳真珠腫の再形成性再発を起こすリスクが大きいと考えられた。

また、それまで難聴の存在によって耳管開放症が遮蔽されている症例が存在することを明確に示し、「不顕性（潜在性）耳管開放症」という概念を新たに提唱した。

以上の検討から、開放耳管に起因する「自声強聴」「自己呼吸音聴取」などの症状の出現に、聴力レベルが大きく影響を与えていることが示され、中耳手術、特に聴力改善手術に際し注意すべき事項であることを示した。

## 審 査 結 果 の 要 旨

耳管開放症の出現と聴力の関係は、これまで特に注目されることはなかったが、今回聴力の良否（聴力レベル）と耳管開放症の症状出現には密接な関係があることを検討した。耳管開放症患者では自声聴取・呼吸音聴取などの不快症状を避けるため、『鼻すすり』を行うことで耳管を閉鎖させ、症状を軽減させているケースがあり、中耳真珠腫の成因の1つとも成り得るが、この『耳のための鼻すすり』の有無に、患者の聴力レベルが関係していることを示した。つまり、背景に鼻すすり癖をもつ後天性中耳真珠腫群と、鼻すすり癖をもたない後天性中耳真珠腫群において、術前の気導聴力、および気骨導差の術前後の変化を比較した結果、①術前の気導聴力は、『耳のための鼻すすり』を有する群の聴力は、有さない群の聴力に比べ、有意に良好であること。②術前後の気骨導聴力低音域（250, 500, 1000 Hz）での変化を比較すると、術後に『耳のための鼻すすり』を止めることが出来た群では、気骨導差が縮小（聴力改善）している例も、拡大（聴力悪化）している例も様々であったが、術後に『耳のための鼻すすり』を継続している例では、一様に気骨導差に変化がない（聴力不変）か、または縮小（聴力改善）していた。『耳のための鼻すすり』の継続に関しては、聴力の良悪が大きく関係しており、聴力が良好な症例ではこれを止めることが出来ず、中耳真珠腫の再形成性再発を起こすリスクが大きいと考えられた。

また、それまで難聴の存在によって耳管開放症が遮蔽されている症例が存在することを明確に示し、「不顕性（潜在性）耳管開放症」という概念を新たに提唱した。

以上の検討から、開放耳管に起因する「自声強聴」「自己呼吸音聴取」などの症状の出現に、聴力レベルが大きく影響を与えていることが示され、中耳手術、特に聴力改善手術に際し注意すべき事項であることを示した。

よって、本論文は博士（医学）の学位論文として合格と認める。

